

京都大学	博士（文学）	氏名	吉野 齊志
論文題目	ベルクソン、科学と実証形而上学—数理物理学との対話—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、ベルクソンの実証科学とのさまざまな関わりを通して、彼の「実証形而上学」のあり方を解明しようとするものである。ベルクソンは、科学の知によっては取り逃がされてしまう本来的時間性としての「純粹持続」を哲学の探求対象としたことで知られている。だが他方で、科学を学的正確さのモデルと見なし、哲学者たちの共同の努力によって漸進的に進歩する形而上学を主張した。そして実際、同時代の科学につねに目を配り、それを深く取り込みながら自らの哲学を展開してきた。こうした諸科学との深い関わりは、ベルクソンの「実証形而上学」へとどのように反映しているのか。本論文は、そうした関心に基づいて、ベルクソン哲学の基礎的性格を従来とは違った視点から描き出し（第一部）、その上で、ベルクソン哲学と科学の諸問題との接点を、さまざまな具体例を通して探っていく（第二部）。</p> <p>第一部は以下の五つの章からなる。</p> <p>まず第一章では、ベルクソンが根源的時間として見出した「純粹持続」の性格を明らかにする。純粹持続は計量不可能であって、線のような空間的表象で表現することはできず、そこでは過去・現在・未来という時制の分節も根源的ではない。空間的に表象される時間と根源的時間である純粹持続との本性的な差異は、前者が「完了相」であるのに対して、後者が「未完了相」である点に存している。</p> <p>第二章では、ベルクソンが純粹持続の特性と見なした「自由」のあり方について検討を行う。ベルクソンは自由行為の「予見不可能」な性格を主張するが、それは、ラプラスが主張するような古典力学の計算可能性を踏まえつつ、それとの対置において考えられている。ただし、彼の自由は物理学から完全に独立した問題ではなく、心理的領域と物理的領域との接点が存在している。人間が予見不可能な自由行為をなすということとは、その行為の座となる身体が、外から観察された時に決定論的法則に従っているといえるかどうか、という問題を提起するからである。そこから出てくるのは、自由に行為する存在は外から観察しても計算可能な古典力学的系とは異なる振る舞いを示すのではないか、というある種の実証的予測である。</p> <p>第三章では、「同一性の観念」および「力動図式」に関するベルクソンの考えを検討し、それを通して人間の思考の働き方の解明を目指す。まず、ベルクソンにおいて、内的持続から空間的表象への表出が、思考の、ひいては生命の本質的特徴であることを示す。その上で、このベルクソンの立場を、アンリ・ポアンカレやロジャー・ペンローズのような数学者たちの議論と比較する。それによって、この問題系が人間的思考と計算機械の違い、ひいてはAIという現代的問題系にも繋がるものであることが明らかになる。ポアンカレとペンローズは、いずれも数学的理解を論理に還元する</p>			

ことを拒み、数学の営みにもその根幹には直観的なものがあることを主張する。このことは、思考し理解して行為する意識的存在と計算機械とでは、外的に観察できる振る舞いからして異なるということの意味している。

第四章では、ベルクソンにとって数学的・科学的認識の基礎にあるとされる「空間」観念の解明を行う。これは当時広く論じられていた主題であり、非ユークリッド幾何学の発見から、空間をアプリアリとするカントの考えを批判する議論も存在していた。これを踏まえて、まずはベルクソンの空間論が、そうした議論を知悉した上で、カント的空間論をある点までは継承しつつ形成されたことを明らかにする。その上で、このベルクソンの立場が、一般相対性理論におけるリーマン幾何学の使用を踏まえた現代においても、ある程度までは有効であり続けることを示す。

また、ベルクソンにおける空間論と知性論の関係についても論じる。ベルクソンにとって空間は知性的思考の基盤である。知性的思考とは比較計量する思考であり、そのためには対象を仮想的に切り取り、移動させ、重ね合わせる必要があるからである。この条件の下で、全てが重ね合わせ可能な既知の要素へと分解されうるのであり、そこから「同じ原因からは同じ結果が生じる」という法則性の認識が可能になるのである。

第五章では、ベルクソンにおける哲学の方法論、彼の言う「直観」理論の検討を行う。たしかに認識原理のレベルでは、ベルクソンは「直観」と「分析」を対置し、直観の方に「絶対的なもの」を認識する能力を認める。しかし、実際の哲学の営みにおいては、直観の所与に分析が加わるという形で、両者が相補的に働いているとみなす。たしかに、分析は相対的であり、それだけでは事物そのものには到達しない。そして、分析の営みと不可分な言語は、本性的に空間的なものであって、持続する実在を十全に表現することはできない。しかしそれでも、学知が成立するためには、直観を概念化し、たえず語り直しを続けることが不可欠なのである。

以上、第一部では、諸科学と深く関わり続ける実証形而上学の企てという視点から、ベルクソン哲学の基礎となる諸概念を描き直した。これをもとに、第二部では、『持続と同時性』におけるベルクソンの相対性理論との対決を主たる題材として、ベルクソン哲学と同時代および今日の科学の諸問題との接点を、より具体的な仕方たどっていく。

まず第六章では、相対性理論を誤解していたと評される『持続と同時性』において、ベルクソンが何を問題にしたかったのかを明らかにしていく。それによって、物理学に対する「誤解」には還元されない彼の問題意識とその意義を浮かび上がらせる。ここでベルクソンは、「実在的時間」と「虚構的諸時間」の区別を提唱し、相対性理論によって複数化するの「虚構的諸時間」だけであると論じるのだが、それはまずもって相対性理論によって生じる「双子のパラドックス」を解決するためであった。たしかに、物理学の観点からすればそこに逆説はないとしても、ベルクソンはそ

れだけでは満足しない。光速に近い速度で宇宙旅行をしてきた人物が地球に帰還した時にどのようになるとしても、特殊相対論の記述に従えば、片道の道中ではそれぞれ、宇宙船に乗った旅行者と地球上の人物は、共に相手の時間経過を自分よりも遅いと見なしていることは間違いない。ベルクソンが異議を唱えるのは、このような理論的記述をただちに実在に対応していると思なすことに対してなのである。

次に第七章では、それでもベルクソンの議論にはやはり、宇宙旅行をしてきた人物と地球上の人物はまったく同じだけ歳を取るという、現在から見れば実証的に誤った結論へと導く記述があることを指摘する。その上で、そのような記述がなされた背景を解明しつつ、ベルクソンが表明的に述べていることを超えて、そこから超えた別の相対性理論解釈の可能性を探求する。

ベルクソンは、相対性理論において互いに移動している二つの系を徹底して「相互的」と見なすが、それは物理学を、もっぱら幾何学的位置関係の変化としての運動を扱うものと見なしているからである。実際、この意味での運動は、どの物体が静止しどの物体が動いているかについて、まったく相対的である。それに対して、ベルクソン自身は「絶対的運動」の実在性を認める。それは幾何学的変化ではなく、むしろ宇宙全体の質的な変化である。この主張は、宇宙全体の付置を参照するという点で、運動の相対性を唱えてニュートンを批判し、アインシュタインにも大きな影響を与えたエルンスト・マッハの議論とも接近を見せる。すなわち、ベルクソンの絶対運動と相対論とは単に対立するのではなく、どの物体が静止しまた運動しているかは相対的であっても、そうした相対的諸関係の総体を絶対運動として見る立場をベルクソンは開こうとしたのである。そこから、ベルクソンの理論に立脚しつつ、一般相対性理論を、ベルクソン自身の考えていた以上に実在的で絶対的な運動の質的な面を把握する理論として評価する可能性も開けてくるのである。

最後に第八章では、一つの実在的時間という『持続と同時性』のベルクソンの主張の意義と射程を明らかにするべく、『創造的進化』の宇宙論的時間論とそれにかかわる諸問題を、現代物理学の見地とも照応しながら検討する。現代ではしばしば特殊相対性理論から「ブロック宇宙」的世界観を導き出すような主張もなされているが、「ブロック宇宙」的な考えを批判し宇宙全体の時間の実在性を主張するという問題意識を読み込むことにより、ただ一つの実在的時間という彼の議論の意味を明らかにすることができるであろう。

また、彼の宇宙論的時間論は熱力学の第二法則という物理学の成果を引証してもいる。本章では、彼の問いの立て方がけっして現代物理学の問い方から遠いものではなく、物理学で今なお重要な意味を持ち続けている問題と接していることを示す。ただし宇宙の起源と歴史というのは、ビッグバン宇宙論という形で二十世紀に大きな進展を見た分野でもある。そこで最後に、現代物理学の観点を踏まえて時間を空間化する物理学を批判し、時間の復権を唱えている現代の論者として、哲学者ロベルト・マン

ガベイラ・アンガーと物理学者リー・スモーリンの自然哲学を参照する。彼らの時間論は、物理学の対象たりうる時間を問題にしている限りでは、つねにベルクソンの「純粹持続」論と重なるわけでない。それでも多くの点でベルクソンと共有する論点があり、ベルクソンの問題意識の現代的継承者と見なすことができるであろう。

以上の論述をもとに、「結論」では、ベルクソンの実証形而上学について総括を行う。そこで明確になるのは、ベルクソンの遂行する実証形而上学は、科学的真理の地位から「神」の問題に至るまで、ことごとくデカルト主義と対照をなしていることである。デカルト的の神は宇宙の最初にすべての法則を定めて覆すことなく、その連続創造は最初の創造を保存するだけにすぎない。そして誠実さにより、人間がその法則を認識できるようにしてくれる知の保証者である。これに対しベルクソンの宇宙では、既存のものとその組み合わせについて成り立つ法則性をはみ出す新しいものが生じる余地がつねにあり、「神」はそうした真に新しいもの創造の源泉である。法則とは生成する実在に対して知性の構築した近似に過ぎないのである。

この点において、実証形而上学は科学の営みと共通する性格をもつ。科学もまた、たとえ永遠不変の法則を想定してその探求を目指していても、その実際の営みにおいては、未知のものを、新しい発見を求めるものだからである。決定的な真理を手中にしているという独断を離れ、既存の学説をたえざる見直しと転覆へと晒すことにより進歩するというのが、科学を科学たらしめる性格である。ベルクソンの「実証形而上学」もまた、対象領域の性格の違いにより、科学の場合以上の困難に行き当たるとしても、やはり同様の漸進的進歩を標榜するのである。

(論文審査の結果の要旨)

ここ十年ほどの間、ベルクソン哲学研究の最前線では、共通する性格をもつ新たなタイプの研究が急速に台頭してきている。それらは、「直観の哲学者ベルクソン」という旧来の紋切型を脱して、ベルクソン哲学が同時代の諸科学への踏みこんだ関わりの中で展開してきた事情を精査した上で、そこから今日の科学と哲学の関係をも照らす新たな洞察を引き出してこようとするものである。本論文は、そうした研究動向の進展と同時進行的に遂行されてきた研究の成果であり、論者の分野横断的な博識、および英・仏・独・伊語の文献を自在に参照する卓越した語学力により、類例の少ない個性的な論考となっている。

本論文の特性は、ベルクソンが自らの哲学的営為を「実証形而上学」と称していたことにあらためて注意を向けて、「実証性」を哲学と科学の接触面とする思索としてベルクソン哲学を描き直そうという姿勢に表れている。持続や直観というベルクソンの中心概念は、その形成過程を詳しく辿るならば、科学の実証的次元への還元不可能性が強調される一方で、この次元との接触と交流の中で揺れをほらみながら形づくられてきたものであることが見えてくる。哲学と科学の「境界のあり方を問うた哲学者」というのが、論者の基本的なベルクソン像となる。

このような見地から、全五章よりなる第一部では、持続、直観、自由、潜勢態、力動図式、空間といったベルクソン哲学の基礎となる諸概念について、哲学と科学の「境界」面からの描き直しが進められる。その際論者は、この作業をベルクソン内面的に進めるだけではなく、ポアンカレやリーマン、ヴントやヘルムホルツなど、同時代の数学者や科学者たちの仕事と縦横に連関づける。それによって、ベルクソンの主要概念が担う予見不可能性や計算不可能性といった特性が、反科学的な非合理主義を意味するのでは全くなく、むしろ古典的な計算可能性の枠を踏み越えて大きく転回しつつあった同時代の諸科学の状況に深く掉さしたものであることが証示されるのである。こうした考察は、多様な論点を連関づけながら進められているために、それによって用意された思想史的・学説史の見取り図は大変興味深いのが、そこからベルクソン哲学の基礎概念の解釈がどのように更新されるのかについて、考察がやや平板に見える箇所もある。とはいえ、「必ずしも一般的ではないベルクソン像を強調」しようとする論者の試みは、全体としては説得的であり、今後のベルクソン研究に対してさまざまなヒントを提供しうるものである。

これに対して、全三章よりなる第二部では、相対性理論を批判的に論じた『持続と同時性』を主たる参照軸としながら、本論文の副題が示すように、ベルクソン哲学と「数理物理学との対話」の具体相へと踏みこんでいく。『持続と同時性』での批判には相対性理論の物理学レベルでの誤解によるものもあることはしばしば指摘されてきたが、論者はこのテクストを、そうした誤解や行き違いの事実関係も含めて詳細に検討する。その上で、そうした誤解の背後に、相対性理論との対話において作動しているベルクソン哲学独自の实証性探究を見分け、そこに彼の持続概念を照らし返す哲学

的意義を認める。加えて、現代の宇宙論などを参照しながら、そこには科学的知が大きく進展し刷新された「現代から見ても命脈を保つ論点」があることを示そうとするのである。この第二部については、ベルクソン研究の枠を超えた高度に専門的な物理学上の論点の扱いがやや慎重さを欠くように思われるが、『持続と同時性』をめぐる論争と解釈の歴史を丹念に検討し、自らの立場から首尾一貫した見解をうち出せている点は、ベルクソン研究への貢献として評価することができる。

最後に「結論」では、以上の考察を踏まえて、ベルクソンの「実証形而上学」について、論者の立場からの総括がなされている。ここでは、ベルクソン形而上学が行き着いた生成する実在の源泉としての神概念が、デカルトの神概念および形而上学との対照性において取り上げられる。そして、それを参照軸として、この「実証形而上学」が科学の営みと協働しうる可変性と漸進性をもつものとして構想されていたことが確認されて、論が閉じられる。

新たな視点からのベルクソン哲学像の描き直し、同時代の諸科学との交差・協働関係の精査、『持続と同時性』という特異なテキストの大胆な読み直し、現代の科学知からみたベルクソン形而上学の再評価等、いくつもの課題に同時に取り組み、それなりに首尾一貫した論文にまとめ上げた論者の力量は、並々ならぬものがある。ただ、その分、個々の論点の掘り下げは必ずしも十分とはいえず、それらの連関づけが表面的なものにとどまっている箇所が目につくのも事実である。ベルクソンの宗教哲学的な理解において重要な意味をもつはずの「実証形而上学」の内実の解明は、いまだ道半ばであるといわざるをえない。しかし、そうした点は論者自身が十分に自覚しており、論者の今後の研鑽によって克服されると期待できる事柄であって、本論文自体の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2019年12月12日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。